

## 主 題：仮庵の祭りについて

聖書箇所：ヨハネの福音書 7章1-13節

この朝からいっしょに見ていきたいのはヨハネの福音書7章です。特に、きょうは1-13節を学んでみたいと思っていますけれども、その前に前回までの流れを少し思い出してみてください。私たちが先週まで見ていた6章の始まりは、群衆がイエス様の後に従っていた場面からでした。男性だけで五千人、女性や子供を合わせれば二万人とも言われる多くの人たちが、病をいやすイエス様の奇蹟を目にして、またそのうわさを聞きつけて集まっていたのです。そして、そんな彼らがイエス様のもとで実際にイエス様の力を味わいました。与えられたパンと魚でお腹がいっぱいになった結果、どうなりましたか？彼らは興奮を抑えきれずに叫び始めるのです。「この方こそ私たちが待っていた王様だ。」と。まさにこの時、この瞬間、群衆の関心や期待、熱意は最も高まっていました。始まりはほかに並ぶものがないほどイエス様の人気は最高点にあったのです。しかし、それも長くは続きませんでした。

次の日、イエス様は興奮してついて来た群衆に向かって、ご自分がだれなのかを明らかにしました。すると、彼らはすぐにイエス様を拒むようになります。ほんの24時間前までは「自分たちの王様だ」、「やっと待っていた王様が来たのだ」と叫んでいた者たちが、同じイエス様に向かって「ひどいことばだ」、「だれが聞いておられようか。」とぶつぶつぶやくようになりました。イエス様の後に従っていた群衆は本当の弟子ではありませんでした。彼らは自分たちが思い描いていたイエス様が与えてくれるものは愛していました。しかし、実際のイエス様のことばは到底受け入れられるものではなかったのです。別にこれは驚くべきことではありません。まさにこの福音書の著者ヨハネが最初から述べていたことでした。1章を見てみると11節にこのようなことばがあります。イエス様はこの地上に来ました。「この方はご自分のくににいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」と。本来であれば世の救い主、いのちのパンが来たことは、すべての人にとって最高の喜びになるはずでした。しかし、かたくなだった群衆たちは、最初はそこにいたけれども、終わりにには離れて行ったのです。それが6章の流れでした。

そして、この流れを受けて続く7章へと入っていきます。覚えていてほしいのは、ここから先はひたすらに下り坂です。6か月後にイエス様は十字架にかかることになりますが、そこまでイエス様の人気は下がり続けていきます。代わりにイエス様に対する民の敵意や憎しみは増大していきます。イエス様はここからますますのちまでもがひんぱんに脅かされるようになるのです。そのような危険と隣り合わせの中で、イエス様は地上にあって残された時間を父のみこころに従って働きを全うしようとされます。これから私たちが見ていくことは、そのような危険と隣り合わせにあったイエス様がどのような働きや歩みをなされていたのかということです。ある意味、この7章のところからが転換点とも言える部分になるわけですが、きょうは1-13節のところをまず最初に見てみましょう。

ヨハネ7：1-13

「:1 その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである。:2 さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。:3 そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざをすることができるように、ここを去ってユダヤに行きなさい。:4 自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」:5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。:6 そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。:7 世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。:8

あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」：9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。：10 しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にではなく、いわば内密に上って行かれた。：11 ユダヤ人たちは、祭りのとき、「あの方はどこにおられるのか」と言って、イエスを捜していた。：12 そして群衆の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話がされていた。「良い人だ」と言う者もあり、「違う。群衆を惑わしているのだ」と言う者もいた。：13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった。」

## ○仮庵の祭りについて

### 1. 敵意と喜びが入り混じる祭り 1-2 節

この箇所をきょうは大きく四つの部分から考えてみたいと思います。一つ目に見て取れるのは敵意と喜びが入り混じる祭りです。どういうことなのでしょう？もう一度、みことばを見てください。1 節と 2 節にこのように記されていました。「：1 その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである。：2 さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。」と。ここで二つのことばに注目してみてください。この時のイエス様を取り巻いていた状況がよくわかることばが特に二つ使われていました。

#### 1) その後

一つ目に「その後」ということばです。7章の最初に、「その後」ということばが使われていました。この「その後」とはいったいいつのことを指しているのでしょうか？もちろん6章で見てきた一連の出来事の後のことです。ただし注意してほしいのは、必ずしも6章の出来事の数日後や数週間後を表しているのではないのです。ヨハネ6：4に「……ユダヤ人の祭りである過越が間近になっていた。」とありました。この過越の祭りは、春頃3月、4月に祝われていたものでした。そして7：2を見ていただくと、「……仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。」と書いていました。別のユダヤ人の祭り、仮庵の祭りが近づいていましたよと。この仮庵の祭りは、春ではなく秋ごろ、10月に祝われていたものでした。ということは計算してみてください。7章と6章の間には少なくとも6か月から7か月ぐらいの時間が空いていたということです。少し思い返してみると「その後」ということばは、ほかのところにも出てきました。もう一度、6章に戻ってみると、6章の最初も「その後」ということばで始まっていました。そして、その時にも説明しましたがけれども、5章と6章の間にも数か月から半年、1年ほどの期間があったとされてきました。

因みに、5章でどのような出来事があったのか覚えていますか？イエス様はエルサレムを訪れて、38年もの間、病気にかかって床に伏せていた人物をいやしていました。いついやされましたか？イエス様は安息日にいやされていました。そして、安息日にいやただけでなく、ご自分が父なる神様と等しい同じ神様なのだと言ったのです。その結果、ユダヤ人指導者たちは敵意を抱くようになりました。カンカンに怒ってイエス様を迫害しようと、殺そうとするようになったのです。ヨハネ5：18に「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」とはっきり書いていました。エルサレムにあって、最初5章でイエス様に対する憎しみが燃え上がりました。律法学者たちはカンカンに怒って、イエス様を殺そうとしました。その怒りや憎しみから退かれたイエス様は、6章にあってガリラヤに行きました。そして、ガリラヤでとどまり、そこで働きをなします。そしてその後、イエス様はまたエルサレムに戻ろうとするのです。それが7章のことでした。

5章から7章まで実に約1年以上が経過していました。5章でイエス様に憎しみを燃やしていた指導者たちは、この1年の間でどのようなようになったと思いますか？7：1に書いていました。「……イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである。」と。ユダヤ人指導者たちは怒りをおさめていたのではありません。彼らの憎しみは薄

れるばかりかより根深いものになっていました。1年たった後も変わらずに、いやそれ以上にイエス様のことを殺害しようとしていました。彼らにとってイエス様は、まるで賞金首やお尋ね者だったのです。想像できますか？そのような人たちが待っているエルサレムに、イエス様が足を踏み入れて、彼らに一瞬でもその姿が見つかれば、いのちを奪われる危険が現実の問題としてあったということです。そのような危険な状態が7章から続いていく背景にありました。

## 2) 仮庵の祭り (ユダヤ三大祭り：過越の祭り、五旬節の祭り)

そして、もう一つだけこの時の背景としておさえておきたいのは、7：2に出てきた仮庵の祭りです。仮庵の祭りは、ご存じの方もいるかもしれませんが、ユダヤの三大祭りの中で最も人気のものでした。みなが大好きな祭りだったのです。この祭りは収穫をすべて終えた時期に行われる喜びの祭りとして知られていました。エルサレムの周辺に住んでいた成人男性たちはみなこの祭りに参加することを義務付けられていて、祭りの時期になるとエルサレムの町はもう何万人という人たちでごった返していたのです。また、この祭りの期間中はこの仮庵ということばからもくるように、町のあらゆるところに仮の住まいが建てられました。町のありとあらゆるところに、家の屋上、路地裏、広場とか神殿の庭といったところに至るまで、人々は自分たちで枝や葉っぱで作った仮の小屋を建てて、そこに住みました。祭りの期間中はその仮小屋に暮らしたのです。どうしてそのようなことをしたと思いますか？その目的は人々がいつも、いつまでも覚えているためでした。何をかと言うと、それは神様がかつてエジプトの地から自分たちを助け出してくださったこと、そして何よりも助け出してくださった神様が荒野をさまよい続けていた間、自分たちとともにいて、常に自分たちを導いてくださっていたことを忘れないためでした。

この祭りの目的について神様ご自身がはっきりと述べています。レビ記23：42-43に神様がこのように目的を記しています。「：42 あなたがたは七日間、仮庵に住まなければならない。イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。：43 これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。わたしはあなたがたの神、【主】である。」と。ですから少し想像してみてください。この祭りはユダヤ人たちにとって、1年の中でも最高の時でした。1年間苦勞して、苦勞して、苦勞して働いた成果である収穫物を手にすることができただけでなく、かつて神様が忠実に自分たちを導いてくれたこと、養ってくれたことを思い出す時だったのです。家族や友人や親戚の人たちも含めて子どもから大人まで、彼らはみんな仮の小屋を町中に建てて、そしてそこで1週間ほどキャンプしました。キャンプ好きにとっては楽しいと思うかもしれませんが、かつての人たちにとっては、それこそ最高の1週間だったのです。

そしてそのような最高の祭りの間にあって、彼らは一つ特別なことをしました。人々は毎朝神殿にやって来ました。少しこの光景を思い浮かべてみてください。1週間の間、人々は毎朝起きて、神殿にやって来ます。そして、金の水差しを持っている祭司といっしょに少し離れたシロアムの池へと行進していくのです。祭司を先頭に立てて、そのうしろには何千、何万人という人たちが後をついて行きました。そして、その後をついて行っている間、ずっと彼らは詩篇やイザヤ12：3にある「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。」ということばを繰り返し、繰り返し叫びながら、賛美しながら進んで行くのです。朝からみんながそのようなことをしました。祭司の後をついて「喜びながら救いの泉に行くのだ」、「そこから水を汲むのだ」とずっと叫びながら行きます。そして、池に着いて水を汲むと、彼らは帰りもまた同じように大きな声で賛美や感謝をしながら、神殿へと戻って行くのです。

そして、神殿に戻ってきた祭司は、汲んできた水を祭壇の上に注ぎました。なぜならこれは荒野を旅していた時に神様が水を与えてくださったことを思い出し続けるためでした。ですから仮庵の祭りは、水にもすごく関連しているのです。ヨハネ7：37-38に「：37 さて、祭りの終わりの大なる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。：38 わたしを信じる

者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」と記されています。仮庵の祭りでこの発言をしたのです。人々はすぐに意味がわかりました。この方が神様で、この方が生ける水を与えてくれるお方なのだと。そうやって、祭司は神殿に水を注ぎます。そしてその水が注がれた瞬間に人々は大きな声で叫んだのです。「主に感謝せよ。主に感謝せよ」と。それが7日間、毎朝続きました。町の中には喜びや感謝があふれていたのです。仮庵の祭りは人々にとって喜びや感謝だけのはずでした。しかし、私たちがさっきも見たように、この祭りの中に大きな敵意が紛れ込んでいたのです。

## 2. 信じないイエスの兄弟たち 3-5節

敵意と喜びが入り混ざっている祭りの中、それが起ころうとしている中、イエス様の上に最初の問題が降りかかりました。それが二つ目の部分です。二つ目に見て取れるのは、信じないイエスの兄弟たちです。3-4節にこのように続いています。「:3 そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるよう、ここを去ってユダヤに行きなさい。:4 自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」と。まず言えるのは、マリヤが一生涯処女だったと主張する人たちがいますけれども、しかし、この箇所がそれは絶対に違うと教えていました。この箇所からも明らかのように、イエス様にはほかに兄弟たちがいました。特にマタイ13:55を見てみると、少なくとも4人の弟たちがいて、その名前が挙げられていました。4人の名前「ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ」と。最初に出てきていたヤコブという人物は、新約聖書の書簡の一つであるヤコブの手紙を記すことになる人物でした。

そして、そんなイエス様の弟たちはもちろんのことイエス様が行ってきたみわざ、働きを間近で見続けてきました。カナの婚礼で水をぶどう酒に変えた時も、いろいろな病気の人たちをいやされた時も、悪霊を追い出していた時も、彼らはその場において自分たちの目でイエス様に何ができるのかを目撃していました。弟として最高の特等席で、兄のイエス様がなされることを見続けていたのです。だからこそ弟たちはだれよりも兄であるイエス様のことをわかっていると思いました。それゆえに彼らはイエス様に向かって言っていたのです。「ここを去ってユダヤに行きなさい。」と。「1年訪れていなかった首都エルサレムに戻りなさい」と。「このような隠れた場所、ガリラヤで働きをしてもだれにも気づかれませんが」と。「もっと多くの人たちの前で、あなたの持っているすごい力を見せつけなさい」と。このことばを発した弟たちの動機がどこにあったかはわかりません。もしかしたら彼らはイエス様の人気徐徐に、徐徐に衰えていっていることに不安や心配を覚えていたのかもしれませんが。なぜなら6章の最後で2万人以上の人たちがイエス様のもとから離れて行ったのです。彼らはもちろんそのニュースを知っていたでしょう。もう一度、エルサレムに行って、たくさんの人の中で、すばらしいみわざをなせば、離れて行った連中が「やっぱりすばらしい、また帰って来よう」と再び戻って来るのではないかと、彼らは考えたのかもしれませんが。

また、もしかしたら彼らはイエス様を王様にする事で、自分たちにも人々の関心が注ぐのではないかと思ったのかもしれませんが。兄弟が民の指導者になれば、自分たちもその恩恵にあずかれるかもしれないと考えてもおかしくなかったでしょう。詳しい動機はわかりません。彼らはまるでイエス様の選挙運動を推し進める支援者かのようにふるまっていました。そして、支援者たちにとって、自分たちの自慢である兄イエス様を人々に見てもらうのに、年に一度の皆の人氣が集まる仮庵の祭りほどふさわしい舞台はなかったのです。当時の世界の中心であったエルサレムに最も人々が集まって来るその祭りの場所でわざを行えば、最も多くの弟子たちを集めることができるに違いないと考えた兄弟たちは、イエス様をとて強く促しました。この3-4節だけを読むと、兄弟たちはイエス様のことをサポートしていたかのように思えるかもしれません。

しかし、ここに驚くべき事実がありました。続く5節に「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」と書いています。さっと読み過ぎすかもしれませんけれども、少し立ち止まって考えてみてください。「信じていなかった」とはどういうことでしょうか？イエス様の兄弟ほどイエス様と時間を過ごしていた者たちはいませんでした。十二弟子たちも長くて3年だけです。兄弟たちは生まれてから20年以上もイエス様と同じ屋根の下で、いっしょに育ちました。彼らはイエス様が親に対して一回も罪を犯さない姿を見ました。イエス様が一回もうそをつく姿を見たこともなければ、イエス様が一回もお腹が減って、ブツブツ文句を言う姿を見たこともありません。大工であったお父さんの仕事を手伝う姿を見ました。イエス様の教えや知恵を長年聞きました。イエス様がなすさまざまな奇蹟も彼らはほかの人以上に数えきれないほど目の当たりにしました。しかし、それでも彼らはイエス様を信じていなかったというのです。この時の彼らの心はイエス様のもとを去っていた群衆たちと何ら変わりませんでした。確かに兄弟たちほどイエス様に関する知識を持っていた人はいません。しかし、残念ながら彼らも自分たちの思い描いていたイエス様を求めていたに過ぎませんでした。自分たち罪人に必要な救い主としてではなくて、この世の問題を解決する存在としてしかイエス様を捉えていなかったのです。

そして、このような兄弟たちの姿から私たちはどのようなことを学べるのでしょうか？何を私たちに教えてくれるのでしょうか？それは、どれだけイエス様に関する知識を持っていたとしても、どれだけ真理に触れていたとしても、どれだけイエス様の力や知恵に感動し、驚きを覚えていたとしても、それが救われているのと同じではないということです。今に当てはめて考えるのであれば、どれだけ私たちが礼拝に出席し、教会で仕えていたとしても、どれだけ正しい答えを聖書から答えられたとしても、それが本当の信仰を持っていることと同じではないということです。本当の信仰とは、どのような時もイエス様とそのことばをそのまま自分のこととして受け入れることでした。自分が思い描く、自分に都合のいいイエス様のことばを受け入れるものではありません。みことばが描いているイエス様の姿を、みことばが語っていることばを、私たちはそのまま素直に信じ従っていくのです。兄弟たちは長年イエス様と時間をともにしてはしていました。しかし、まだこの時にはイエス様が何者なのかを理解していなかったのです。イエス様の兄弟たちも、群衆たちやほかの人たちと同じように不信仰の心を持っていました。

これと同時に、もう一つ大切なことをこの部分から学ぶことができます。神様はたとえ不信仰でかたくなな者にも救いを与えることが可能だということです。おそらくここにいる多くの人たちはいろいろな祈禱課題を持っています。そして、多くの人たちに共通する祈りは、たぶん家族の救いでしょう。自分の両親や伴侶であったり、自分の兄弟姉妹や子どもであったり、私たちは自分たちにとって身近な人であるほどその人がずっとかたくなに救いを拒んで歩んでいるのを見たら、心が痛くなります。長年にわたっていろいろな機会に福音を伝えていれば、どうしてこんなにも信じないのかと悲しみを覚えることがあると思います。もう無理なのかかもしれないと諦めてしまいそうになることもあるかもしれません。しかし、そんな時は今回の場面を思い出してください。イエス様と何十年もともにいた兄弟たちがイエス様を拒み続けていました。一番救いに近いところにいたはずの者たちが、一番イエス様から遠く離れたところにいたのです。この事実はイエス様をどんなに悲しませていたでしょう。けれども感謝なことに私たちはみことばから知ることができます。少なくとも彼らは後に救いへと導かれました。十字架で死によみがえったイエス様と出会った彼らは、イエス様がだれなのかを本当に知って、そしてただ恵みによって救いへと導かれるのです。そのひとり、ヤコブのことを考えてみてください。ヤコブも最初はかたくなでした。しかし、かたくなだった彼も救われ、変えられて後に教会を支える柱になり、それだけでなく新約聖書の一つの手紙を書くまでになったのです。ヤコブはその手紙の最初をこのようなことばをもって始めていました。ヤコブ1：1に「神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。」と書かれています。ヤコブは、最初イエス様に言っていたのです。「こんなところを去って早くエルサレムに行きなさい」、「公の場で、自分のことを示しなさい」とイエス様に対し

て命令していました。しかし、そのようなヤコブが救われて変えられ、こう告白したのです。私は「神と主イエス・キリストのしもべ」です、イエス・キリストの奴隷ですと。どんなにかたくなな者でも、神様には不可能はありませんでした。だからこそ、皆さん私たちも諦めることはしないのです。救いは神様がすべて働かれる以上私たちにできることは、この方に信頼して、祈り、福音を語り、主のあかしを立て続けていくことでした。神様の働きに私たちも期待できます。信じないイエス様の兄弟たち、それが二つ目に見て取れることでした。

### 3. 適切な時を待つイエス様 6-10節

次に三つ目の部分です。三つ目に見て取れるのは、適切な時を待つイエス様です。兄弟たちにエルサレムに行くようにと訴えられたことばに対して、イエス様は続けてこのように答えていました。ヨハネ7：6-10にこのように書いています。「:6 そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。:7 世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。:8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」:9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。:10 しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にではなく、いわば内密に上って行かれた。」と。さて、この箇所を読んで、率直にどのように思いましたか？私自身は最初、正直混乱しました。なぜならイエス様は「祭りには行きません。」と言っていたのに、実際は後になって祭りに「上って行かれた。」のです。いったい何が起きているのでしょうか？ある学者は、この箇所をもってイエス・キリストは計画的にうそを言ったと主張しています。もちろん私たちはイエス様が決してうそをつくことのないまことの神様であると信じていますけれども、それならこの箇所はどのように理解すべきなのでしょう？

#### ▶わたしの時はまだ来ていません。

この部分を理解するのに大切な鍵になるのは、「わたしの時はまだ来ていません。」ということばの「時」ということばです。ヨハネの福音書を何回も読んでいくと、イエス様はご自分の「時」や「時間」の話をされることがしばしばあります。たとえば、すでに見たヨハネ2：4で、イエス様は母親に向かってこのように言うのです。「すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」と。このようにしてイエス様はご自分の時はまだ来ていないということばを何回か繰り返されます。そして、繰り返される場合のこの「時」には“ホーラ”ということばが使われていました。そして、この“ホーラ”ということばには、主に「神様によって定められた時間」、「イエス様の十字架の時」を表す意味合いが含まれていました。したがって、母親に対してイエス様が言っていたことは、わたしの「十字架の時」はまだ来ていません、まだ先ですという話をしていました。ただし、覚えていてほしいのは、今回私たちが見ているヨハネの7章では、このことばは使われていないということです。

#### ◎「時」(カイロス)「何かを行うのに最も適切なタイミングや絶好の機会」

この7章の部分においては“ホーラ”ではなく“カイロス”ということばが使われていました。ここだけ“カイロス”ということばが使われています。このことばには、時という意味のほか「何かを行うのに最も適切なタイミング」や「絶好の機会」という意味が含まれていました。「まさにこの瞬間」、「今、今」というのが、このカイロスということばの持っている意味でした。つまりイエス様がここで言わんとしていたことは、実は非常にシンプルなものでした。イエス様は祭りに行くつもりがなかったのではありません。兄弟たちが「今、ユダヤに行きなさい」、「今ここを去ってエルサレムに行きなさい」と言ったことに対して、イエス様は「いやまだ、その時は来っていない」、「今ではない」と。今、このタイミングで行けば、最も望ましい、最高の機会を逃してしまうことになりますと答えていたのです。イエス様は初めから自分のことを殺そうとしている指導者たちにおびえて、恐れを持っていたからエルサレムに行かな

かったのではないということがわかります。イエス様は最初からどのタイミングでエルサレムに行くべきなのか、いつそこに戻れば救い主として来られた働きを最大限に果たすことができるのかをご存じだったということです。そして、イエス様が考えていたタイミングは、兄弟たちが求めた瞬間ではありませんでした。彼らが求めていたような形でもありませんでした。イエス様は兄弟たちとの話し合いの時、適切な時、適切な形をただ待っていたということです。そして、兄弟たちが去って行き、その瞬間がやって来た時、イエス様はそれを逃さずに自ら内密に上って行きました。したがって、ここには何の矛盾もありません。イエス様こそ、この状況においても、すべての詳細に至るまでいつも思いのままにすることのできる主権者だったのです。ですからイエス様は「わたしの時はまだ来ていません。」と言いました。

その一方でイエス様の兄弟たちは違いました。彼らは何も待つ必要がありませんでした。この時、真実代わりに世を愛していた彼らにとっては、祭りに行くタイミングはいつでも構いませんでした。だからこそ、イエス様は7：6の後半で「わたしの時はまだ来ていません。しかしあなたがたの時はいつでも来ているのです。」、8節で「あなたがたは祭りに上って行きなさい。……」と言うのです。イエス様を信じていなかった世を愛していた者たちにとって、タイミングなんてありませんでした。「いつでも行っていいですよ」と。

そして、そんな兄弟たちに対して、イエス様は7節でこのようなことばを残していました。「世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。」と。このことばのうちに大切な真理が言われていました。「世はあなた方を憎むことはできません。」と。世は同じように世を愛している者たちのことを憎むことはないということです。しかし、その一方で世は「わたしを憎んでいます。」と。世はイエス様のことは憎みます。イエス様を信じる者たちも同様に世は憎みます。どうして世はイエス様を信じている者たちのことを忌み嫌うのでしょうか？イエス様が攻撃的で、嫌われて当然の態度を取るからでしょうか？そうではありません。信仰者がだれが見てもひどいふるまいをするからでしょうか？いいえ、そうではありません。もし信仰者たちがどんなに柔和であわれみをもって接したとしても、みことばを忠実に語ろうとするならば、キリストに喜ばれる者となることを追い求めるのであれば、この世は必ず、必ず信仰者に敵対するようになります。それは、世が光によって、罪の暗闇が明らかにされることを拒むからでした。真っ暗闇にとどまっていた者たちにとって、光は照らしてほしくないからでした。生まれながらの罪人は、悪い行いに浸っています。その悪い行いを悪いものだとかあかしし、そして自分たちが愛している罪を手放すようにと求めるイエス様は拒む対象でしかありませんでした。

そして、この真理は昔から今に至るまで何も変わっていません。同じヨハネの中でもはっきりと知られていました。ヨハネの15章を見ても、イエス様は弟子たちにこのようなことを約束していました。ヨハネ15：18－20で「18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。……」と言います。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害することを覚えてなさいと言われていました。イエス様は迫害されましたか？迫害されました、もしではありません。わたしが迫害されたから、あなたがたをも迫害しますと。ですから私たちが家族や友人、どこかで会う人であれ、愛をもって、あわれみをもって福音を誠実に伝えようとする時、その相手が話を聞きたくないと言ったとしても驚くことではないということです。私たちが真理をもって罪を明らかにし、ただその罪からの救いや赦しを与えてくれるイエス様に立ち返るようにと訴える時、その相手がむしろ怒りや敵意を示して関係が壊れてしまったとしても、それはイエス様が約束していたことだということです。

しかし、私たちは時にこの約束を知っていても、そんな難しい状態に陥りたくないから真理の方を勝手に妥協して、人々が受け入れやすいようにと、波風立てないように和らげようとする誘惑にかられることがあるのです。そんな時は、私たち覚えておかないといけません。私たちが真理を語るのであれば、やみを愛している者はそれを拒みます。救いはいつも恵みでしかありませんでした。罪を愛している者がその罪を忌み嫌うことができるのは、神様のあわれみでしかありませんでした。

そして、恵みによって私たちが救われたのであれば、恵みによって救われてこのキリストのメッセージを伝える使節として召されたのであれば、私たち使節としてできることは主人のメッセージ、イエス・キリストをそのまま伝えてあげることです。迫害され、苦しみ、そして十字架にかかって、私たちの罪のために死んでくださった救い主をどんな時も大胆に語り続けていくことです。そして、そこには約束されている通りに、当然、苦しみや戦いは出てきます。しかし、主の足跡に従って歩むその歩みは決して無駄にはなりません。イエス様自身がこのような約束を与えてくれていました。マタイ5：11-12にこのように書いています。「：11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。：12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。……」と。みことばが言われているとおりになっていることを見ても驚くものではありません。みことばが言われていることを信頼して、そしてなすべき働きを忠実になしていくことです。世が憎むイエス様は、同時に私たちにとって主権者なる主でした。それが三つ目です。

### 3. 的外れな群衆たち 11-13節

そして、最後にもう一つだけ四つ目に見て取れるのは、的外れな群衆たちです。残りの箇所を見てください。11-13節にこのように書かれていました。「：11 ユダヤ人たちは、祭りのとき、「あの方はどこにおられるのか」と言って、イエスを捜していた。：12 そして群衆の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話がされていた。「良い人だ」と言う者もあり、「違う。群衆を惑わしているのだ」と言う者もいた。：13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった。」と。ユダヤ人指導者たちは、祭りの間中、ずっと熱心にイエス様を探し求めていました。見つけてサインをしてもらうためではありません。激しい憎しみに駆られ続けていた彼らは、イエス様を捕まえて殺害しようと必死になっていたのです。初めにも言いましたが、彼らの敵意や怒り、憎しみはあまりにも根深いものでした。そして、彼らに加えて祭りに集まっていた群衆たちの中にもイエス様に関して、さまざまなことがうわさされていました。ある者たちはイエス様のことを指して、「あれは皆を惑わしている偽りの存在だ」という者たちもいました。イエス様を否定していたのです。しかし、同じ群衆の中には「イエス様は良い人だ」と口にする人たちもいました。殺意や敵意を持って否定していた者と違って、ある者たちは「良い人です」と、イエス様に対して好意的な印象を抱いていたのです。しかし果たして、この「良い人だ」と言っていた人たちは、イエス様のことを信じていたのでしょうか？いいえ、彼らも心から信じていたわけではありませんでした。これは昔も今も何も変わっていません。今もある人たちは言うかもしれません。「イエス・キリストって名前は知っていますよ」、「愛や優しさにあふれているすごい方だったのですよね」と。「私もそのような人は好きですよ」、「実は私もイエス様の教えを聞いたことがあります」と。「そのいくつかの教えに同意しますよ」、「この方は優れた一人の教師だったことは私も信じますよ」と。このようにあからさまに否定するのではなく、真っ向から否定するのではなく、イエス様は良い人だと好意的に捉えるような人たちはたくさんいます。

しかし、ここで肝心なのは、イエス様は単なる「良い人」ではないということです。これはヨハネの福音書を見ていけば明らかでした。この群衆たちも明らかに知っていておかしくありませんでした。地上に来たイエス様は、すでにいろいろな場面で主張されていたのです。たとえば、イエス様は言われていました。「わたしの父は今に至るまで働いています。」と。「わたしも働いているのです。」と、わたしには「さばきを行う権利が父から与えられています。」、そのように言っていました。ほかの場所でも「わたしは天から下

ってきたパンです。」(ヨハネ6：58)、わたしがいのちを与えることができます、わたしが終わりの日に人々をよみがえらせることができますと、イエス様はそのことを繰り返し語っていたのです。

そして、ことばだけではありません。イエス様は神様にしかできないみわざを数々なされてきました。水をぶどう酒に変えることも、荒れ狂う嵐を静めることも、病人をいやすことも、また人の罪を赦すこともなされてきました。そして、この後、最後には十字架にかかって死んだだけでなく、約束どおりに3日目に墓からよみがえるのです。このような人物のことを単に「良い人だ」と言えるのでしょうか——。言えません。イエス様を表す時に、「良い人」というカテゴリーはありませんでした。この方こそまことの神、まことの救い主だったのです。残念ながらある人たちはこの事実を認めようとせず、イエス様のことを聞いた時に、「そのようなことは全部偽りにすぎません」、「イエス様なんてもう全部がうそに決まっています」と言う人たちもいます。

しかし、そうだったら不思議ではありませんか？偽りに過ぎなかったのだったら、どうしてイエス様を当時の指導者たちは熱心に殺そうとしたのでしょうか？偽りに過ぎなかったのだったら、どうして最も卑劣な犯罪者にのみ与えられる十字架につけたのでしょうか？偽りに過ぎなかったのなら、どうしてイエス様のことを多くの弟子たちは心から信じ、ずっとこの方のことを伝え続けてきたのでしょうか？この方が偽りだったとしたら、どうして信じた者たちは、たとえ迫害を受けて残酷な最期を迎えることになったとしても、自分たちのすべてをささげて、この方をあかし続けてきたのでしょうか？それが偽りではないことを教えてください。この方がご自分の言われたとおりの方であるからです。ですからイエス様は単なる「良い人」でも、惑わす人でもありません。この方こそすべての人がひざまずいて、ただ信じ従うべき唯一まことの神様、約束の救い主でした。群衆たちは的を外していました。

果たして、私たちは今どのようにイエス様のことを捉えているのでしょうか？もしまだ自分自身のこととして、この方を本当に知らない方がいるのであれば、どうかきょう素直にこの方を信じ受け入れてください。イエス様はあなたにとって単なる「良い人」ではありません。罪人である私やあなたにとって、唯一の希望を与えてくれる最高の救い主です。どうかその救い主に助けを求めて、罪を悔い改めて、この方を自分の救い主、主として信じ従ってください。

またもうすでにイエス様を信じているという皆さん、このすばらしい主をあかしすることを日々喜びとしているのでしょうか？当時信じていなかった群衆たちは違いました。最後13節に「しかし、ユダヤ人たちは恐れのため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった。」と書かれています。好意的な人もいましたが、陰ではさまざまなことを言いました。しかし、人目につかない場所ではイエス様を認めているかのように見えても彼らはすべてうわべだけだったのです。私たちは違うはずです。仮庵の祭りは7章から始まりました。そして、私たちは7章を続けて見ていきますけれども、この最大の舞台にあって、イエス様は再びご自分がだれなのかを明らかにされます。群衆の前で変わらずに、イエス様はご自分がまことの神、救い主であることを教えようとされます。私たちがその偉大さを知っているのであれば、その主によって救われたのであれば、使節として召されたのであれば、今週もますますこの主のためにあかしを立てる者として、ともに歩いていきましょう。